

(独) kategoriale Anschauung

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43350

カテゴリー的直観 [(独) kategoriale Anschauung]

カテゴリー的対象を与える直観。フッサールによれば、一般に意味志向は直観によって充実される。もっともこのことは、判断、想像、想起、願望などの言表が、それに対応する直観によって充実されて初めて理解されるということではない。むしろ直観による言表の充実は、対象の認識なのである。たとえば「Aは赤い」という判断はAを見ずとも理解

されるが、それがAについての認識になるのは実際に赤いAの知覚によって充実される場合である。ところで厳密に言えばこのような知覚言表の場合でも、充実されるのは名辞の意味だけでなく言表の意味全体である。すると、言表に命題的形式を与えているカテゴリー的諸契機はどのような仕方で充実されているのであろうか。つまりたとえば「赤いA」ではなく、「Aが赤いこと」という〈事態〉は何によって充実されているのであろうか。この問題に捧げられた『論理学研究』第2巻第6章では、カテゴリー的諸契機とは「ある」(Sein), 「一つの」(Ein), 「すべての」(Alles), 「そして」(Und) といった存在, 単一性, 全体性, 連言などを意味する論理的諸規定とされている。赤は見えるが「赤いこと」は見えないように、これらのカテゴリー的契機は外的知覚に代表される感性的直観一般の領域の中にはその対象的相関者をもっていない。それゆえカテゴリー的契機を充実するのはある意味で超感性的な知覚であらざるをえず、それがカテゴリー的直観と呼ばれているものである。ここでカテゴリー的契機とカテゴリー的直観との関係が、感性的対象と感性的直観との関係に擬せられていることは明白である。「それゆえ普通の用語では、総体, 不特定多数, 全体性, 基数, 選言肢, ……事態などが〈対象〉と呼ばれ、そしてそれらを所与として現出させる作用が〈知覚〉と呼ばれるのである」[LU II/2 143]。しかしカテゴリーの対象は、感性的知覚において端的に構成される実在的对象、すなわち直観の最低段階のリアルな対象ではなく、イデア的な高次の対象であり、その意味でカテゴリー的直観は感性的知覚のような基礎作用に基づけられた、新しい客観性を構成する作用である。すなわち「AはBに隣接している」という事態が構成されるには、AとBと隣接関係の三者の感性的直観を形成するだけでは不十分であり、これらの直観を制御し適切に形式

化し結合するカテゴリー的直観の作用が必要なのである。⇒㊦事態, 知覚, 直観 (柴田正良)